

# 近代の短冊蒐集家が探求した香川景新の短冊 — 景新の書風の変化と新出の「景真」款短冊を中心に —

内 田 誠 一

## 要 旨

## 一、序

近代における短冊蒐集家が血眼になって探求したものに、江戸中期の歌人・香川景新かげちかの和歌短冊がある。著名な蒐集家であり研究家であった森繁夫は、その名著『名家筆蹟考』において、景新の短冊を「珍中の珍」と評している。

本稿では、これまで発刊された短冊関連書籍等に掲載された景新の短冊図版や個人蔵の景新短冊の写真を分析し、その書風の変化について考察した。また、このほど出現した「景真」款の景新短冊についても些か分析を進めてみた。

## キーワード

短冊、珍短、香川景新、香川宣阿、香川景樹

近代における短冊蒐集家が血眼になって探求したものに、江戸中期の歌人・香川景新かげちかの短冊がある。大正初期頃から短冊ブームが起り、富裕な蒐集家が珍しい短冊（短冊蒐集の世界ではこれを「珍短」と呼ぶ）を狙って蒐集するようになった。本稿で論ずる香川景新の短冊は、この珍短の筆頭に挙げられる存在であった。生涯に五万枚の短冊を蒐集し、短冊の考証・研究にも優れた功績を残した人物に森繁夫（一八八二～一九五〇）がいる。森は岡山の素封家の出身で、早稲田専門学校（現・早稲田大学）を卒業し、摂陽商船専務取締役を務めるなど実業界で活躍した。実業家でもあった森は、まさに富裕な知識層に属する一流の短冊蒐集家であった。森はその名著『名家筆蹟考上』において、珍蔵する景新の短冊二枚を図版として掲げたうえで、巻末の解説で景新の短冊を「珍中の珍」と評している。

本稿では、これまで発刊された短冊関連書籍などに掲載された景新の短冊図版や京都の個人コレクター所蔵の景新短冊の写真を分析し、生涯におけるその書風の変化について考察したい。あわせて、新出の「景真」款の景新和歌について書写年代を推測し、これまで知られていなかった「景真」の名についても詮索してみることとする。

## 二、香川景新とその短冊の評価

香川景新（一六七八～一七三九）は江戸中期の歌人。京の「一条の今西行」と称せられた歌人・香川宣阿（一六四七～一七三五）の子として生まれた。字は士龍、李允・光阿と称し、梅仙・梅仙堂・光阿と号した。

ここでまず、父の宣阿（名は景継）について確認しておきたい。本稿のこれからの考察に資するものがあると思われるからである。井上通泰『南天莊雜筆』（春陽堂、一九三〇年）に収載される宣阿の自伝（漢文体）を次に現代語訳してみた。宣阿と交流のあった香川景長の家に代々伝わったものという。

景継 隣善を改めて一枝軒淵龍と号した。壮年のころより京都に遊学して、宇都宮由的ならびに木下順庵に就いて儒学を学び、阿野大納言公業卿に和歌を学んだ。公業卿亡きあとは白川二位雅喬王に就いた。雅喬王亡きあとは、清水谷大納言実業卿に就いて歌道について訊ねた。実業卿亡きあとは中院内大臣通茂公に学んだ。通茂公薨去ののちは武者小路中納言実陰卿に学んだ。藤沢の遊行寺四十五世他阿尊上人より古今伝授の二条家・冷泉家の二流を受けた。また阿野公緒卿より古今を伝授され、伏原二位宣幸卿より有職故実を学び、『職原鈔』の講義を受けた。持明院大納言基時卿から入木道ならびに郢曲を伝授され、里村法眼昌程より連歌を学び、乾市郎右衛門永貞に就いて甲州軍法を学んだ。後に剃髪して僧となり、梅月堂堯真宣阿と号し、京都に住して大炊道場聞名寺二十九世の其阿随真人を師とした。父の正矩が著述した『陰徳太平記』を補った。

この文章だけが自伝のすべてではなく、井上和歌に関連する部分を中心に抽出した可能性も考えられよう。というのも、京都に遊学して「宇都宮由的や木下順庵に儒学を学んだ」とだけ、さらりと書かれているが、実は京都では初めは儒者として活動していたようである。井上が引いている原本の所在が不明なので、

原文を確認しようがない。もしかすると、宣阿が意図的に儒者であった時代のことに触れないようにしたのであろうか。

そのような宣阿の子息として生まれた景新は、幼少の頃より父親の教育のもと、梅月堂の二代目として成長していったのである。景新の短冊が珍重されるのは、伝来の短冊遺品が少ないだけではなく、高名な歌人の子息であるからではないだろうか。さらに、江戸後期から明治にかけて勢力を誇った桂園派の鼻祖・香川景樹が、景新より三代後の香川景柄（かげもと）の養子となっていた時期がある、ということも見逃してはならないであろう。

さて景新の短冊であるが、森繁夫がその著で景新の短冊を「珍中の珍」と評していることは既に述べた。もともと短冊は国文学者や歌人などによって蒐集されていたようであるが、次第に一般知識層へと蒐集が広がっていくようになる。以前筆者は、研究代表者として共同研究をした際の成果論文「近世から近代にかけての短冊の諸相―文事・蒐集・影印の周辺―」『公益財団法人日本習字教育財団学術研究助成成果論文集 Vol. 4』（二〇一八年）の第二章（内田担当）で、次のように記した。

明治末期に影印された坂本（桂治）の影響により、大正時代以降、短冊蒐集家の間で、とりわけ「珍短」を重視するようになったのであった。それは国学者や歌人ではない一般知識層の人々が短冊を蒐集しはじめたことにより、歌のできばえや筆蹟の多様性、時代背景などを短冊から深く読み取るという文化的学術的嗜好を重んずるよりも、他の蒐集家が所有していないような「珍短」を血眼になって探すことに執心するようになったという、蒐集の傾向の変化が起こったと考えられるのではなからうか。

坂本桂治は新潟出身の銀行家で、書画、とりわけ短冊の蒐集で名高く、富裕な蒐集家であった。それゆえにかなり強引な方法で短冊を入手したという話も漏れ聞く。珍短を中心に短冊帖の形に木版影印した『遅さくら』『競馬』は知人に配布するためのものであったようで、巷間に出現することはまずない。坂本の蒐集

は短冊蒐集家に大きな影響を与えたと思われるが、井上通泰もその一人ではないかと筆者は推測している。井上は景新短冊を所有していなかったようだが、『南天莊雜筆』に、父の宣阿の和歌短冊に加えて、珍しい漢詩短冊の図版も載せている。

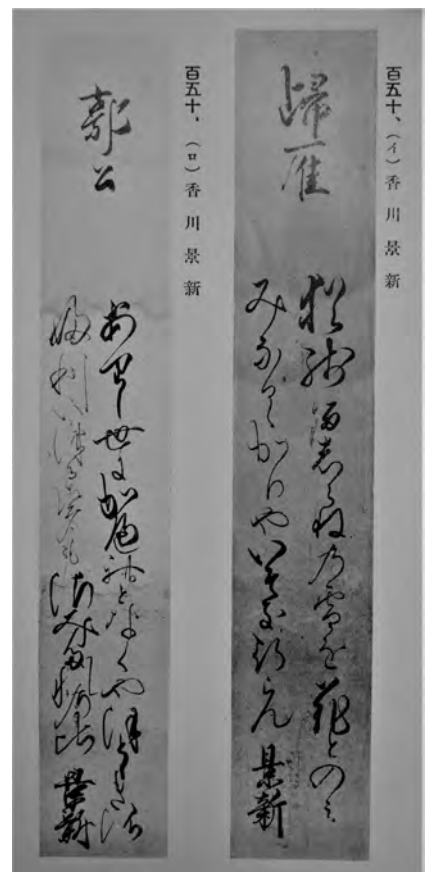
### 三、短冊図版に見る景新和歌短冊の分析

前述の如く森繁夫『名家筆蹟考 上』（横尾勇之助・仲古谷友吉発行、一九二八年）に景新短冊二葉が掲載され、書風により（イ）と（ロ）というように区別されている。本章では、この所載短冊と近似する短冊の書風を言う際には、この二類をイ類、ロ類と表記することにする。次にその図版を掲げる。

書風というものは個々人によって異なることは言を俟たない。しかし、同一人物の人生においても、若年期・壮年期・老年期というように年齢を重ねるうちに書風も変化を遂げるのが普通である。その変化の度合いは人によって異なり、大きく変化する人とそうでない人がいる。また一人で複数の書流を会得して認めている人がいる。江戸の公卿の千種有功は一目見てわかるような個性的な書風であるが、時に大師流で書かれたものを見る場合がある。有功の書については、寡聞にして研究されていないと思しく、確かなことは言えないが、これも年代によるものなのかもしれない。また、明治では昭憲皇太后の作に二種の書風があり、一般的な仮名で書かれたものと有栖川流で書かれたものがあると、その昔書跡研究家の波多野幸彦氏より教示を受けたことがあった。長年様々な書を見ていくうちに、なるほどと合点したことであった。この方々はいずれも短冊に流麗な水茎のあとを残している人物である。

さて、次に景新短冊について、これまでの短冊関連の書籍や書肆のカタログに掲載された図版と個人蔵の短冊図版を並べて比較してみたい。

まず基準作例として、森繁夫所蔵（当時）の二種の景新短冊の図版（『名家筆蹟考 上』）を掲げる。



『名家筆蹟考 上』の解説三三三頁には次のようにある（括弧内の年号は紀元年号。原文のまま）。

号 梅仙堂

京都の人、宣阿の男、家風を守り歌道を能くす 子景平亦和歌を善くし、孫黄中を経て景樹に至る。享年不明なり。元文四己未（二三九九）年十一月廿日没

（本文）

（イ） 帰雁 猶残るしらねの雪を花とのみ

みなる、かりやいそぎ行らん 景新

（ロ） 郭公 ありし世にかへれとなくやほと、きす

ふりいつる声もさみたれの比 景新

（注）

景新の短冊は珍中の珍と称せられる、こゝに所載の（イ）（ロ）二種筆蹟相異せるが如くにて、而かも仔細に之を視れば、「か」の字其他に同一筆致あるを認むべし。

確かに(イ)の短冊第二行の「かりや」の「か(加)」と(ロ)の短冊第一行の「かへれと」の「か(加)」は、ともに「加」の第二画が大きく上に突き出ている。また、(イ)の第一行の「しらねの雪を」の「の(乃)」と(ロ)の第二行の「さみたれの比」の「の(乃)」、さらに(イ)の第二行の「かりや」の「や」と(ロ)の第一行「なくや」の「や」は、それぞれ同じ結体(点画の組み合わせによってできた文字の形)であることが判る。

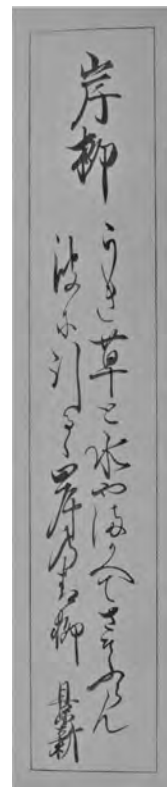
では、なぜ同一人物が書いた短冊二葉が「筆蹟相異せるが如く」見えるのであるか。それは書かれた時期が異なるからと考えるべきであろう。この二種の相違が明確に表れているのが署名である。(イ)の「景」「新」の字はともに楷書に近い行書体で、かつ縦長である。また「新」の字の隣の「斤」の最終画の縦画は長くひかれており、はねていない。一方、(ロ)の「景」「新」の字はともに(イ)に比べてより崩されていて、かつ扁平な形である。また「新」の字の隣の「斤」の最終画の縦画の終筆ははねられている。このように署名の結体が全く異なっていることに注目すべきであろう。

また、両者の全体的印象では、(イ)が比較的温雅な書風であるのに対して、(ロ)は癖が強く、文字の大小や肥瘦を殊更に強調する傾向にあり、時に鋭利な線質が現れる。端的に言えば、技巧性が現れてきた、ということになる。この二種の短冊を基準作例として、これまでの書籍や販売カタログに掲載された図版や個人蔵の写真について、イ類・ロ類両類の中での書写時期の先後について考察してみることにしたい。

筆者は短冊関連の書籍をかなり集めている心算である。しかし書肆や美術商のカタログとなると、目にするものが極めて限定的であることは否めない。文字通り管見の及ぶ限りにおいて、幾つかの図版を見出すことができた。発行年代順に記すと次のようになる。なお、一と二の短冊が収載される書籍にはページ数が記載されていない。

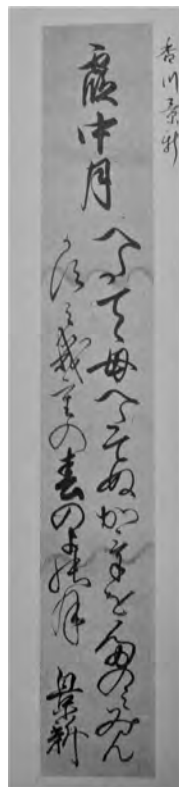
一、坂本桂治所蔵短冊・・・坂本桂治『競馬』(私家版本版影印、一九一三年)所載

岸柳 うき草と水やまかへてさそふらん／波に引る、岸の青柳  
景新



二、秋田彌吉郎所蔵短冊・・・難波短冊研究会『難波津』(非売品、一九一三年)所載

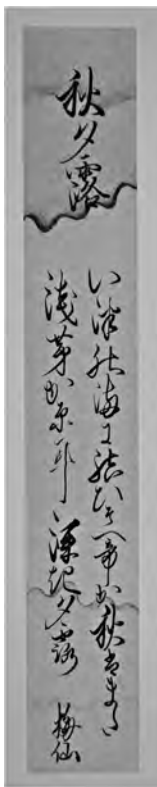
霞中月 へたて、もへたてぬかけをたのみみん／かすミ幾重の春のよの月  
景新



三、『思文閣古今名家書蹟短冊目録 第六号』(思文閣、一九九一年)

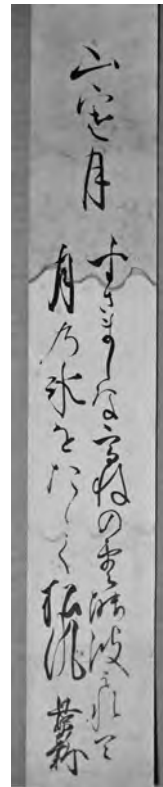
短冊番号 67 (三七頁) 所載

秋夕露 いつのまに結びそへてか秋はまた／浅茅か原に深き夕露 梅仙



## 四、京都・個人蔵「山寒月」

山寒月 すさまじな高ねの雲の波はれて／月の氷をたゝく松風  
景新



それでは分類に移りたい。右の一、四のうち、イ類に入るものとして、二の「霞中月」が挙げられよう。いずれもほぼ同じ大きさに文字を並べて書かれた印象がある。辛辣に言えばまだ短冊を書き慣れていない時期のものと言えよう。森所蔵の(イ)よりはのびやかさが見られるので(イ)よりは少し後の作品と考えられる。

口類に近いものとして三の「秋夕露」の短冊がある。根拠となるのは次の二点。①やや縦長の文字が入ってきており、「海」「秋」「浅」「茅」「耳」「深」と署名の「梅」がそうである。②躍動的であり、「浅」「深」のさんずいや署名の「梅」の木篇などに誇張がみられる。

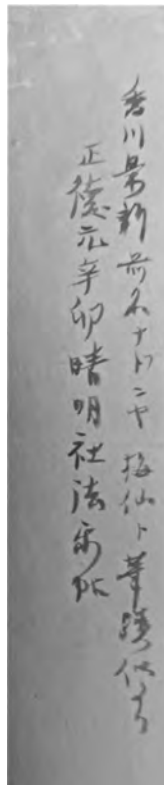
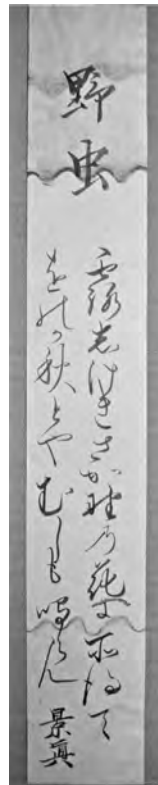
(イ)と(ロ)の中間に位置すると思われるものとして、流麗な風情が漂う一の「岸柳」の短冊が挙げられる。署名こそ(イ)と酷似している時期であるが、「う」の第二画、「水」の第一画のそれぞれ起筆に見られるように、点画の起筆を強調している文字がある。かなり、実直で若々しい書きぶりであり、(イ)には見られない書風である。

最も老筆と考えられるのが、四の「山寒月」である。短冊上部「山」の上に水引の綴穴があるので歌会で書かれたものと想像される。「山寒月」の題書も同筆であろうか。また三折の痕がある。これは(ロ)よりもずっと後の時期のものである。老筆と考える根拠は次の通り。①「す」の字の縦画と横画の起筆や「ね」の結体で誇張をみせるが、筆力の衰えがみられる。②「雲」の横画が点になってしまっている。③時に渴筆が見られ、また三折の上に書いた「の」の字は折れ山

に妨げられて苦心している様子が見受けられる。

## 四、最近出現した「景真」款の和歌短冊をどう鑑るか

最近、「野虫」と題した和歌が書かれ、「景真」と署名のある短冊(京都・個人蔵)が出現した。短冊を反すと、朱筆の細字で「香川景新 前名ナドニヤ 梅仙ト筆蹟似タリ／正徳元辛卯晴明社法楽帖」と裏書がある(図は細字の裏書部分を拡大せるもの)。正徳元年(一七一二)の晴明社法楽帖にある短冊の筆蹟に似ているという意か。同年は景新数えの三十四歳の年である。



これを仔細に見ると、題書も署名も真面目な楷書、歌も純粹無垢な癖のない筆遣いと結体で、いかにも若書きという風情である。無心に筆を走らせている様子があるのか。裏書にあるように、やはり「前名」を書いているのではないだろうか。しかし、景新のことを記した資料に「景真」の文字は見られなかった。果たしてこの「景真」は景新の前名なのか。「真」の字といえば、景新の父・宣阿は剃髪して堯真宣阿と号した。剃髪出家という晩年のことか、と考えるが、宣阿が出家したのは、貞享四年(一六八七)年のことでまだ四一歳であった。子景新は僅か一〇歳であったのだ。となれば、二十代から三十代頃の景新が、家

代々の系字（通り字）である「景」の字に父の法号「堯真」の一字「真」の字を組み合わせて「景真」と名乗っていたと考えても不思議ではあるまい。

さらに書風は、一の「岸柳」短冊のそれと極めて近似している。たとえば、景真短冊の「露しけき」の「き」は「岸柳」短冊の「うき草」の「き」と同じ結体であり、「をのか」の「か」、「鳴らん」の「らん」は、いずれも、「岸柳」短冊の「まかへて」の「か」、「さそふらん」の「らん」と同じ結体である。否、同じ結体というよりも、判で押したかのようにまさしく同じ字形であると言うべきであろう。やはり、この短冊は景新の若書短冊と鑑て良いかと思われる。

## 五、結語

珍短の筆頭に挙げられていた香川景新の短冊を分析してきた。森繁夫の二種の短冊では、署名の「新」の字が縦長か横長かという極めて分かりやすい差異が見受けられた。前者が後者よりも前の時代と考えるのが穏当であった。それ以外の五種の短冊について年代指定を試みた。今後も別の景新短冊が出現すれば、考えも少し変わっていく可能性もあろう。

今回新たに出現した景新の短冊は、前名と思われる「景真」の署名のあるもので、若書きと思われる。これまで「景真」の名は知られていなかったので得難い新資料と言えるのではないかと考え、小論をものしたのであった。この「景真」款短冊を含めた景新の諸短冊の揮毫年代の先後については、別稿で詳しく検討したい。

## 注

(1) 神作研一氏は「初代梅月堂香川宣阿のこと―前半生を論じて時宗との関わりに及ぶ」において、「儒者として在ったそれまでを前半生、歌人として歩いてゆく出家以後を後半生」ととらえている。そして「出家後の宣阿がその名を高めていったのは、元禄期に数多くの貴顕歌会に出詠し、また彼自身清水谷実業、中院通茂、武者小路実陰といった堂上諸家に、直接に、教えを乞うて学んだことによるものである」と断じている。宣阿は四十一歳で出家するのであるが、神作氏は、笹川祥生氏や渡辺隆一氏が様々な記事や資料をもとに、和歌の奥義を極めるために宣阿が出家した、

という主張していることを指摘した上で、論文の後半で時宗との関わりを考察して、「和歌の為に出家したという記事の伝存も故なしとはしない。・・・中略・・・結果的に見れば、それも半分は正しかった、と評せようか」と述べている。

さきほど本稿で引いた宣阿の自伝では、京都に遊学して歌道や連歌のみならず有職故実や入木道、果ては宮廷音楽や軍学まで学んだという。宣阿という人物は熱い向学心のみならず、強烈な上昇志向を備えていたと考えられよう。そして綿密な計画のもとで、自らの地位と名声を高めながら自らの思い描く理想を現実化しさせていったといえるのではないか。

〔二〇二二・六 受理〕

コントリビューター…大迫 正一 教授（書道学科）